

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720138
 研究課題名（和文）なぜ、学習意欲が低いのか：外国語学習者の動機づけを高める指導方略の開発
 研究課題名（英文）Development of motivational strategy for EFL learners

研究代表者
 廣森 友人（HIROMORI TOMOHITO）
 立命館大学・経営学部・准教授
 研究者番号：30448378

研究成果の概要（和文）：本研究では、動機づけを高める要因（動機づけ要因）を特定し、そのような要因と動機づけとの関連を、対象となった調査協力者の全体傾向と個人差の観点から検討した。次に、動機づけ要因を取り入れた教育介入を一定期間にわたって実施し、その効果と同じく全体傾向と個人差の観点から検討した。さらに、これらの研究から得られた教育実践的知見を踏まえた英語教育プログラムの開発、具体的には、英語運用能力判断基準（Can-Do リスト）の策定と、それに基づいた教材開発、カリキュラム設計を行った。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine motivating factors for English learning and investigate whether or not it was possible to motivate EFL learners by introducing an educational intervention based on these factors. More specifically, the manner in which the motivating factors act in terms of enhancing motivation among the students from the perspectives of general tendency and individual differences was examined. Furthermore, based on the results mentioned above, "Can-Do Lists" (benchmarks for evaluating English language proficiency) were created and some effective ways to make good use of them were also suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	330,000	2,130,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：動機づけ、動機づけ方略、個人差、教育介入、英語運用能力判断基準（Can-Do リスト）、教材開発、カリキュラム設計

1. 研究開始当初の背景

学習者が外国語を習得するプロセスには、

さまざまな個人差要因が影響を与えている。なかでも、動機づけは、教育者が直面する最

も複雑で、最も対応を迫られる課題だと認識され (Schidecker & Freeman, 1999), 動機づけの喚起や維持・発達を目指した研究はこれまで数多く行われてきた (Dörnyei, 2001)。これらの研究は外国語教育における動機づけ理論の確立に大きく貢献してきたのは事実だが、その一方で、研究の大半が記述的な傾向にある。すなわち、多くの先行研究は動機づけの構造や発達・変化、あるいは他要因との関連を扱ったものである。より具体的な教育的示唆を得るためには、このような記述研究に加えて、実験的なアプローチを取り入れた実証研究が行われる必要がある。

2. 研究の目的

先述した背景を踏まえ、本研究では、主要な目的として以下の3点を設定した。

- (1) 外国語学習における動機づけを高める要因 (以下、動機づけ要因) を特定する。
- (2) 外国語学習者の動機づけと、(1) の動機づけ要因との関連を、全体傾向と個人差の観点から検証する。
- (3) 動機づけ要因を取り入れた教育介入を行い、その効果を全体傾向と個人差の観点から検証する。

さらに、本研究では、上記から得られた知見を踏まえて、動機づけの視点を取り入れた英語教育プログラムの開発を、発展的な目的として設定した。

3. 研究の方法

(1) 外国語学習における動機づけは多くの研究者の関心を引いてきたが、学習者の動機づけを高める要因 (動機づけ要因) を直接的に扱った研究はほとんど行われていない (Dörnyei, 1998, 2001; 竹内, 2004)。そこで、本研究では、理論研究によるトップダウン・アプローチと調査研究によるボトムアップ・アプローチを併用し、動機づけ要因の整理を行った。

(2) 動機づけと動機づけ要因との関連を検討するために、大学生英語学習者を対象とした質問紙調査を行った。その結果をクラスター分析、共分散構造分析などを利用することにより、全体傾向、ならびに個人差の観点から検証した。

(3) 動機づけを高めると予測される要因を取り入れた教育介入を計画・準備し、大学生英語学習者を対象に実施した。その結果を介入前後の質問紙調査、介入後の自由記述調査を利用することにより、全体傾向、ならびに

個人差の観点から検証した。

4. 研究成果

(1) 教育学、教育心理学などの関連研究分野を幅広くレビューし、動機づけ要因を整理した (表 1)。例えば、Epstein (1988) は、授業を構成する主な要素を (1) 課題 (task) ... 授業で用いる課題や教材の設計や設定、(2) 権限 (authority) ... 授業への学習者の参加や意思決定、(3) 報酬 (reward) ... 進捗状況や達成度の認識、(4) グループ化 (grouping) ... 効果的なグループ形成、(5) 評価 (evaluation) ... 学習や行動の評価基準の明確化、(6) 時間 (time) ... 課題遂行のための適切な時間設定、に分類し、それぞれの頭文字を取って「TARGET」と呼んでいる。したがって、教師は授業の中でこれらの要素をうまく操作することによって、学習者の動機づけを高めることができると示唆される。

表 1: 動機づけ要因を扱った代表的な研究例

研究例	モデルの名称	動機づけ要因
Epstein (1988)	TARGET Model	課題, 権威, 報酬, グループ化, 評価, 時間
Keller (1983, 1992)	ARCS Model	注意, 関連性, 自信, 満足感
Gagne (1965)	Nine Events of Instruction	学習者の注意喚起, 授業の目標提示, 他 9 要因
Deci & Ryan (1985, 2002)	Basic Psychological Needs	自律性の欲求, 有能性の欲求, 関係性の欲求
Schumann (1997, 1999)	Component Process Model	新奇性, 快適性, 目標重要性, 解決可能性, 規範性

(2) 上記で得られた知見のうち、Deci & Ryan (1985, 2002) の自己決定理論に焦点を当て、そこで想定される動機づけ要因 (自律性の欲求, 有能性の欲求, 関係性の欲求) と動機づけとの関連を検証した。研究の結果として、まず、3つの欲求については、各要因間に強い相関が見られた。このことは、自律性、有能性、関係性の各欲求は密接に関連し合いながら、学習者の学習環境に対する認知を規定している可能性があるとして解釈した。また、動機づけに関しては、自己決定理論では、動機づけの各タイプ間にシンプレックス構造を想定しているが、本研究でもそのような構造が得られた。この結果から、日本の英語学習場面においても、Deci & Ryan (1985, 2002) のモデルは適応可能だと判断した。

次に、3つの欲求が動機づけに与える影響については、全体傾向と個人差の観点から、それぞれ分析した。全体傾向の分析からは、

特に自己決定性の程度が高い動機づけ（すなわち、内発的動機づけ）を高めるためには、学習に対する有能感や他者との関係性の欲求が満たされる必要性が示唆された。自律性の欲求に関しては、有能性や関係性の影響を取り除いた場合、動機づけへの強い影響が確認された。個人差を加味した分析の結果からは、動機づけ傾向の異なる4つの学習者群を抽出した。それぞれの群において、心理的欲求の充足具合を検討した結果、動機づけが高い群は3つの欲求の尺度平均も高く、逆に、動機づけの低い群は各欲求の尺度平均がいずれも低いことが示された。上記の分析から、全体的な傾向においても、個人差の観点から見ても、3つの欲求と動機づけの各タイプは密接な関係を持っていること、言い換えれば、自己決定理論における3欲求は、英語学習者の動機づけに強い影響を与えていることを確認した。

(3) 先の研究成果を踏まえ、英語授業において3つの欲求を満たすような教育介入は可能なのか、またそのような介入を通じて、英語学習者の動機づけを高めることは可能なのかを検証した。調査にあたっては、3つの欲求を満たすことを意図した英語学習活動を一定期間にわたって行い、先の調査と同様の質問紙調査（介入前後）、ならびに自由記述調査（介入後のみ）を実施した。調査の結果は、全体としての介入効果と、異なる動機づけ傾向を示していた学習者群に対する介入効果の両面から検討した。

結果として、動機づけ要因を取り入れた指導の効果が確認された一方、その効果には個人差が見られることが明らかとなった。具体的には、動機づけが比較的低い段階にある学習者は、有能感や他者との関係性を満たすような働きかけを求める傾向があるのに対して、すでに高い動機づけを発達させている学習者は、自らの学習プロセスに対する責任や選択といった自律性の欲求を満たすような働きかけを必要とする傾向が見られた。このことは、学習者の動機づけ特性に応じて、求められる学習支援のあり方は異なる可能性があることを示唆するものと解釈した。

以上のような研究成果から、動機づけ要因を取り入れた教育介入はある程度の効果が期待できる一方、その効果には個人差が伴うことが明らかになった。したがって、より効果的・効率的な英語プログラムを開発するにあたっては、学習者の個人差に応じた授業を準備・展開することが重要になると考えられた。そこで、そのような理論実証的知見を踏まえて、学習者の実態に応じた独自の英語運用能力判断基準(Can-Doリスト)を開発し、それを授業で使用する教材(テキスト)や習

熟度別クラスに利用するといった実践的試みを行った。

例えば、英語の各授業で使用するテキストでは、各課の到達目標をCan-Doリストに基づき制定した(具体例としては、[図書]、を参照)。リストに含まれる各学習項目は、学習者を対象とした難易度調査により事前にレベル付け(一定程度の学習者が「できない」と認識している項目は「難易度高」、逆に一定程度が「できる」と認識している項目は「難易度低」と判断)し、提示順序はその難易度情報をもとに決定した。また、習熟度別クラスでは、学習者の習熟度に応じて、指導する項目の重み付け(習熟度の低いクラスでは、容易な項目を集中的に指導し、習熟度の高いクラスでは、段階的に授業の難易度を上げ、最終的には困難な項目まで取り扱う)を行った。このような工夫により、学習者のニーズ(動機)や習熟度などの個人差に呼応した指導と評価を実践することができ、結果として、効率的に学習者の英語力の底上げを図ることができると期待された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

Tomohito Hiromori (2009). A process model of L2 learners' motivation: From the perspectives of general tendency and individual differences. *System*, 37, 313-321. (発行: Elsevier)

廣森友人 (2009) 「愛媛大学版英語運用能力判断基準(Can-Doリスト)の精緻化と妥当性の検証」*ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)*, 20, 281-290. (発行: 全国英語教育学会)

Ryusuke Yamato・Takashi Kimura・Hiromi Tsuda・Junko Carreira-Matsuzaki・Tomohito Hiromori (2009). Pilot lessons integrating learning strategy instruction into English activities at primary schools. *ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)*, 20, 231-240. (発行: 全国英語教育学会)

Naoko Ozeki・Tomohito Hiromori・Ryusuke Yamato (2009). What are L2 learners thinking about while performing a speaking Task? *Proceedings of the 7th Annual Hawaii International Conference on Education*. [CD-ROM] (ISSN: 1541-5880) (発行: Hawaii International Conference on Education)

山西博之・廣森友人 (2008) 「適切な指導と評価を目指した、愛媛大学共通教育「英語」カリキュラム開発への取り組み: 英語運用

能力判断基準 (Can-Doリスト) の開発とその意義」*ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)*, 19, 263-272. (発行: 全国英語教育学会)

折本素・廣森友人・田中英理・山西博之 (2008) 「愛媛大学共通教育「英語」カリキュラム開発への取り組み: 統一英語能力テスト (GTEC for STUDENTS) の導入と効果検証」*四国英語教育学会紀要*, 28, 59-68. (発行: 四国英語教育学会)

Tomohito Hiromori (2008). L2 learners' motivational process from the situation-specific perspective. *Proceedings of the International Conference on Foreign Language Teaching and Learning 2008*. [CD-ROM] (ISBN: 978-983-43160-1-3) (発行: Multimedia University)

廣森友人 (2007) 「タスクに対する取り組みと動機づけ」*四国英語教育学会紀要*, 27, 1-10. (発行: 四国英語教育学会)

田中博晃・廣森友人 (2007) 「英語学習者の内発的動機づけを高める教育実践的介入とその効果の検証」*JALT (Japan Association for Language Teaching) Journal*, 29, 59-80. (発行: 全国語学教育学会)

田中博晃・廣森友人・山西博之・広瀬恵子 (2007) 「教育現場に根ざした英語ライティング研究を目指して: 英作文の指導と評価」*大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要*, 4, 55-72. (発行: 大学英語教育学会中国・四国支部)

[学会発表] (計 20 件)

Tomohito Hiromori (2010). Foreign language learning motivation and three psychological needs. Poster presented at *the 8th Annual Hawaii International Conference on Education*. Hawaii, Waikiki Beach Marriott Resort & Spa. 2010/01/07.

廣森友人 (2009) 「動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」関西英語教育学会 (KELES) 第 18 回セミナー (京都・滋賀地区). 招待講演. 京都: キャンパスプラザ京都. 2009/12/20.

Ryusuke Yamato・Takashi Kimura・Tomohito Hiromori・Junko Carreira-Matsuzaki・Hiromi Tsuda (2009). The Strategy Orientation of Language Teaching (SOLT): Development of an observation instrument for strategy-supported language instruction. Paper presented at *the Asian Conference on Education 2009*. Osaka, the RAMADA Hotel Osaka. 2009/09/24.

Naoko Ozeki・Tomohito Hiromori (2009).

The effects of psychological factors on L2 learners' unplanned speech when performing under pressure. Paper presented at *the 48th JACET Annual Convention*. Sapporo, Hokkai-Gakuen University. 2009/09/05.

廣森友人 (2009) 「プロジェクト型授業による英語学習動機の変化」外国語教育メディア学会 (LET) 第 49 回全国大会 (シンポジウムにおける指定討論者). 兵庫: 流通科学大学. 2009/08/05.

Naoko Ozeki・Tomohito Hiromori・Ryusuke Yamato (2009). What are learners thinking about while they were performing a task? Paper presented at *the 7th Annual Hawaii International Conference on Education*. Hawaii, Hilton Hawaiian Village Beach Resort & Spa. 2009/01/06.

廣森友人 (2008) 「世界に通用する英語力を身につけるためには」2008 年度中国四国工学会大学分科会『工学教育に望まれる英語力』(シンポジウムにおける講師). 愛媛: 愛媛大学. 2008/12/03.

廣森友人 (2008) 「“Situation-specific” な側面から見た動機づけ」大学英語教育学会 (JACET) 第 47 回全国大会. 東京: 早稲田大学. 2008/09/11.

大和隆介・カレイラ松崎順子・木村隆・津田ひろみ・廣森友人 (2008) 「小学校英語活動における学習ストラテジー指導を取り入れた授業実践の成果と課題」全国英語教育学会 (JASELE) 第 34 回全国大会. 東京: 昭和女子大学. 2008/08/09.

廣森友人・山西博之 (2008) 「愛媛大学版英語運用能力判断基準 (Can-Doリスト) の精緻化と妥当性の検証」全国英語教育学会 (JASELE) 第 34 回全国大会. 東京: 昭和女子大学. 2008/08/10.

廣森友人 (2008) 「愛媛大学の英語教育における評価の現状と課題」大学英語教育学会 (JACET) 2008 年度中国四国支部大会『大学英語教育における成績評価と外部試験』(シンポジウムにおける講師). 広島: 広島国際大学. 2008/07/06.

大和隆介・津田ひろみ・木村隆・カレイラ松崎順子・廣森友人 (2008) 「自ら学ぶ姿勢を育てる工夫を取り入れた小学校英語活動: 公立小学校 2 校での質問紙調査と授業実践の結果から」第 38 回中部地区英語教育学会長野大会. 長野: 清泉女学院大学. 2008/06/29.

折本素・廣森友人・田中英理・山西博之 (2008) 「愛媛大学版英語運用能力判断基準 (Can-Doリスト) の開発: 項目のレベル付け」四国英語教育学会第 20 回研究大会. 高知: 高知大学. 2008/06/22.

Tomohito Hiromori (2008). L2 learners'

motivational process from the situation-specific perspective. Paper presented at *the International Conference on Foreign Language Teaching and Learning 2008*. Malaysia, Hilton Petaling Jaya Hotel. 2008/03/18.

折本素・廣森友人・田中英理・山西博之 (2008) 「愛媛大学のカリキュラム改革の取り組み」第7回愛媛大学英语教育改革セミナー『大学英语教育改革における新たな取り組み: Can-Doリストは何を可能にするのか』(シンポジウムにおける講師). 愛媛: 愛媛大学. 2008/03/08.

廣森友人 (2008) 「愛媛大学における英語教育の取組: 成績評価との関連から」第17回広島大学外国語教育研究センター外国語教育研究集会『大学英语教育における成績評価のありかた』(シンポジウムにおける講師). 広島: 広島大学. 2008/03/04.

折本素・廣森友人・田中英理・山西博之・山本武志 (2007) 「共通教育「英語」の成績評価における課題とその解決に向けた試み: 愛媛大学における事例」日本言語テスト学会 (JLTA) 第11回全国大会. 愛知: 愛知学院大学. 2007/10/28.

山西博之・廣森友人 (2007) 「適切な指導と評価を目指した、愛媛大学共通教育「英語」カリキュラム開発への取り組み」全国英語教育学会 (JASELE) 第33回全国大会. 大分: 大分大学. 2007/08/04.

廣森友人・山西博之 (2007) 「愛媛大学における共通教育「英語」の成績評価の現状と課題」四国英語教育学会第19回研究大会. 愛媛: 愛媛大学. 2007/06/24.

Tomohito Hiromori (2007). The effects of instructional intervention on motivating L2 learners: The Self-Determination Theory viewpoint. Poster presented at *the 3rd International Conference on Self-Determination Theory*. Toronto: University of Toronto. 2007/05/25.

[図書](計5件)

小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 (編著) (2010) 『【英語教育学大系 - 第6巻】成長する英語学習者: 学習者要因と自律学習』東京: 大修館書店 (280頁).

廣森友人 (編著) (2009) 『到達目標標準拋型英語一貫プログラムの構築』愛媛: 愛媛大学英语教育センター (96頁).

Ron Murphy・Neil Heffernan・Tomohito Hiromori (2009). *Skills that Thrill: Strategies for Real-World Reading*. Tokyo: Cengage Learning (127頁).

Mark Stafford・Tomohito Hiromori・Hiroyuki Yamanishi (Eds.) (2008). *Stepping Stones to Effective Writing*.

Tokyo: Longman (107頁).

Patricia Lyons・Sunao Orimoto・Tomohito Hiromori (Eds.) (2007). *Fundamentals of Effective Speaking*. Tokyo: Seibido (101頁).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

廣森 友人 (HIROMORI TOMOHITO)

立命館大学・経営学部・准教授

研究者番号: 30448378